様式 D10

博士学位論文審査結果の概要

ふりがな 氏　名	てらい　たかひろ 寺井　孝弘
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	博第 17 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 17 日
学位論文題目	育児困難心性尺度の開発
審査委員	主査　石川県立看護大学　教授　丸岡　直子 副査　石川県立看護大学　教授　武山　雅志 副査　石川県立看護大学　教授　濵　耕子 副査　石川県立看護大学　教授　西村　真実子

審査結果の概要

平成30年1月16日に最終試験及び審査を実施した。本研究の概要と審査結果は以下のとおりである。

この学位論文は、子ども虐待の一次予防を推進するための指標となる親の育児困難心性尺度を開発し、その妥当性・信頼性の検討を目的としている。

申請者は、親にとって現代社会は孤立しやすく育児環境が脆弱なことや親が感じる育児困難が虐待を招く可能性に着目し、親の育児困難に影響する心理的特徴（心性）を尺度開発の手順を踏みながら明らかにした。まず、先行研究やアダルトチルドレン、ドメスティックバイオレンス、複雑性 PTSD の概念を検討し、37 項目の育児困難心性尺度案を作成した。この尺度案を用いて、乳幼児がいる親を対象に World Wide Web 調査を実施し、370 名の回答を分析した。項目分析を行ったのち、構成概念妥当性を探索的因子分析により検討し、4 因子 34 項目に収束し、第Ⅰ因子：見捨てられ不安、第Ⅱ因子：自信のなさによる不安、第Ⅲ因子：猜疑心、第Ⅳ因子：完璧主義と命名している。さらに、確認的因子分析により適合度指標および 34 項目の標準化推定値を示している。併存妥当性の検討では、外部基準として日本語版 PBI（Parental Bonding Instrument）と日本語版 EPDS（Edinburgh Postnatal Depression）を用いて検討している。その結果、子ども時代の被養育体験が養護的であったと認識している親は育児困難心性が低く、被養育体験が過保護であったと認識している親は育児困難心性が高いこと、育児困難心性と抑うつ傾向に関連があったことを明らかにしている。信頼性係数である Cronbach's の α 係数は α=.793～.899 で、内部一貫性を確認している。以上より、開発した育児困難心性尺度は妥当性・信頼性が確認されており、開発した尺度の臨床応用についても提言されている。

本研究は、虐待予防の一次予防（発生予防）に資するために、虐待に至る前の親に現われる育児困難に影響する心理的特徴（心性）を明らかにしており、これまでの虐待の早期発見のためのリスクアセスメントとは異なり、新規性がある。開発した育児困難心性尺度は、虐待発生前の育児困難な親の育児状況を捉えることが可能な指標であり、虐待防止に向けた育児支援方法の提案・開発に寄与するものと考える。

口頭試問において、虐待発生のメカニズムや発生要因、虐待リスクアセスメント、育児困難と虐待発生の関連、虐待予防及び尺度開発に対する専門的知識を有していることを確認した。審査過程では、開発した育児困難心性尺度の 4 因子構造に対する考察の再考・加筆、論文構成の修正、統計検定方法の明記等の指摘があり、2 月 2 日に修正論文が提出され、審査員全員が修正を確認し、最終試験および本審査に合格したと判断した。